

〔研究会〕

私の道元禅師研究

竹内道雄

平成七年二月二十一日（火）

於 愛知学院大学学院会館会議室

はじめに

只今は、川口幹事より過分の紹介をいただき、又小出学院長先生からは、身に余るお言葉を頂戴し、大へん恐縮かつ光栄に存じております。

さてこの度、今年度最後の禅研主催の研究（発表）会開催に当たりました、学内外の禅研・参禅会関係者、大学生の皆さん方、五十名にも及ぶ多数の方々にご参集下さいまして、大へん驚き、かつ嬉しく思っております。

当初、川口幹事の方で、今年度最後の研究会の講師を物

私の道元禅師研究（竹内）

色しておりましたが、たまたま一月初旬の役員会、運営委員会席上、私が、今年度末、定年退職と同時に禅研究所所長を退任するということを発表させていただきました。そこで川口幹事の方から、それでは、所長としての退任の挨拶を兼ねて、研究会の講師として、これまでの私の道元禅師研究について、気楽に話していただけないかという依頼、提案がありました。そういわれますと特にお断りする理由も見出しませず、委員会の皆様方も賛同されましてかくなつた次第でございます。

一

それでは早速本題に入らせていただきます。題して「私の道元禪師研究」ですが、最近の「道元禪師研究」については、鏡島元隆先生、近くは石井修道博士がこれをまとめられ、特に石井博士の『最近の道元禪師研究に想う』（石見曹洞宗青年会）は詳細で精緻を極めております。たいへんむずかしい問題がたくさんあり、若手の新進の学者船岡誠氏は私への賀状に「最近の道元禪師研究にはついてゆけません」と添え書きされました。私はこれらの研究を決してさけるわけではありませんが、この度はこれとは全く切り離してやらせていただきます。私のこの度の話は、私がどうして道元禪師に関心を持ち、そしてその研究に志し、どのような経緯を経て現在にいたって、現在に何を課題にしているかなどについてその概略を思いつくままに、また私の半世紀余りに亘る人生の生活体験をも交えて申し上げたいと存じます。いささかでも皆さま方のご参考になればこの上ない幸せでございます。お手許にメモがあります。大体その順序に従って話を進めて参りたいと思

います。

まず、私は大正十一年（一九二二）生まれで、今数え七十四歳、満七十二歳、この五月で七十三歳になります。従いまして大正・昭和・平成と三代に生き、戦前・戦中、戦後を体験して現在にいたっているものであります。越後新潟県、雪国十日町の古刹に生まれました。神宮寺と言って、神仏混合の平安仏を本尊とし、近世茅葺の大きな伽藍を持つ曹洞宗の寺院で、県の文化財に指定されており、昭和五十七年NHKゆく年くる年に放映になっていますが、無檀家で、不得定多数の地区民の信徒によって支えられています。宗門においては最低の階級査定で、「無一物の骨山」貧寺です。それで幼い子供のころからいつも父にこのことを言われて育てられて参りました。貧寺でしたが、お寺の法のお蔭で、それ程生活に不自由もなく小学校、中学校へ進みましたが、骨山・貧寺はご多分にもれず、住職が二足のわらじをはき、兼務で何か在俗の仕事がなければ、現実的には仲々やってゆかれません。

たまたま中学二年（十五歳）の時、「我が志望」という作文の題を出され、この時、教育者となって将来は住職も

父のあとをついでやってゆこうと決意して書き綴ったことでした。しかし、旧制中学の三～五年次になり上級学校の進学を決め、具体的に学校をどこにするかということになると、時局の影響があり、先輩、友人が陸士、海兵を受験して合格したりしますと、教師志望の志もゆらぎ、陸士を受験しましたが、適性なきを知らされ、再び教師志望に回帰いたしました。そして新潟の旧制師範学校と旧制高等学校を一年浪人して受験し、両方ともなんとか受かって、高等学校進学を決めました。浪人の一年間は小学校の代用教員をして受験勉強をしましたが、この一年間の代用教員の経験が私の「教師志望」を決定せしめたといえるようであります。

それはとにかくとして私は昭和十六年四月旧制新潟高等学校へ入学しました。この年の十二月八日太平洋戦争が始まるのですが、哲学の赤松元通先生によって、始めて「道元禅へ開眼」されたのです。それは先生が今も余りにも有名になっていて、禅師の『正法眼蔵』『現成公案』の「仏道をならふといふは自己をならふなり、自己をならふといふは自己を忘るるなり」を引用されて「道元禅師の哲学」

私の道元禅師研究（竹内）

を話されたからです。当時私は仏教はお葬式、法事、お彼岸・お盆の行事、毎年行う大般若会、朝のお勤め、と思っていたし、道元禅師の名前は分かっているも外は何も知らず、自分の寺の「曹洞宗」の意味も知りませんでした。ですから赤松先生のこのご講義は私に大きな衝撃を与えました。そしてこの道元禅師の「自己をならふ」ということが、ソクラテスの学問の出発点であった「汝自身を知れ」の言葉と共に、私自身のその後の学問研究の源泉となったことでした。こうしていわゆる真理思慕の念に燃えて哲学書、思想書を読みあさったことです。当時京都大学の西田哲学及びその流れの学者による著書が主流でしたが、秋山範二『道元の研究』『道元禅師と行』、佐藤得二『仏教の日本的展開』、田辺元『正法眼蔵の哲学私観』、井出隆『哲学以前』、橋田邦彦『正法眼蔵釈意』等を耽読しました。これが私の「道元禅師研究」の出発点であったと言ってよいようであります。しかしこれは要するに知識としての教養としての「道元禅」を身につけることでしかありませんでした。しかし、この年の十二月八日太平洋戦争の勃発を契機に大きく思想的転換が行われたように考えられます。もちろんそ

の前から小学校・中学校の時代の教育によって自然と培われていた国家主義的国粹主義的思想には当然関心は強かったのですが、太平洋戦争勃発を契機に道元禅・哲学を含め、国粹主義思想に一層の関心が深まり、しかもそれらが全て、これまでの単なる教養として身につけるのではなくて、自らの死生観を確立するものとして、さらには“死”への意義づけ、“死”に直面しての安心立命の哲学思想として追求されるようになりました。そして戦局にだんだん日本の敗色が濃くなつてゆきますと、ついに戦争に勝つための思想的、行動的武器が要求されるにいたつたのです。そうなりますと道元禅師の宗教と哲学、思想をもつてしては戦争で“死ぬ”ことはできません、敵を相手に武器をもつて戦うことはできません。こうして私は、当時、部活、クラブとしてやっていました剣道との関連や剣道部先輩の影響等もあつて、日本国の危機的状況下にあつていわゆる国難を打開した人たちの行動と思想に真剣切実な関心が寄せられました。それは蒙古襲来の時に戦つた鎌倉武士、建武中興を為しとげた南朝の武士、明治維新を成就させた幕末勤皇の志士たちの行動と思想でした。根本においてこれらの先人

たちの行動と思想を習うことによつて、これを来るべき“学徒出陣”に転用しようと考えるに至つたのです。これらの先人たちが殆ど“死”を度外において、国難のために、理想の実現のために、“横綱貴乃花”ではありませんが、“不惜身命”に戦つた行動と思想に強く引かれ、これを主体的に身につけようとほんとうに真剣に考えまた剣道等に励んだことでした。こうして高等学校の二―三年の時代には折角目ざめた“道元禅”の研究はもちろん、関心も薄れて道元禅師は私の心の底に眠つてしまつたのです。こうして私はその根本において、日本の歴史の中に日本の民族の歴史的生命の中に、自己の生命を委ねんとして、そしてまた一面、日本の仏教への未練も捨てきれずに、東大の国史学科を選んで進学したのでした。昭和十八年の十月のことです。そして在学二か月、この間に、日本民族の永遠の生命の中に自己のいのちを委ね、東洋・世界の永遠の平和、アジアの解放、祖国の防衛のために、その“捨て石”になる覚悟を固め、それを本望とし名誉とも使命とも考え、十二月一日勇躍して“学徒出陣”したのでした。

昭和二十年八月十五日の終戦は、台湾の台北で迎えまし

たが、なかなか日本の敗戦を信ずる気にはなれぬまま、復員業務を行っていました。たまたま軍の仕事で、台湾の最南端のガランピ（ナン）岬を訪れ、その灯台に上りました。ところがその灯台の中に「民国三十四年祖国復興」の字がおどるように書かれていました。私はこの文字を見て愕然とし、日本⇨祖国の敗れたことを始めて実感として受けとめたのです。そしてこわれ果てた灯台の上に登り、バシー海峡を見渡しながら物思いにふけていたところ、海岸で漁民たちが、舟や網を使って漁りに励んでいるのが目に入りました。この時に私は、「人間にはこうした生活があったのだ、私がこれまで必死で行ってきた戦争に勝つための生活は異常な生活だったんだ、私にもああした日常生活が可能なんだ」そういうことが、罪におののくような気持ちで今更のように思い出されたのです。そして、学生時代に学んだ道元禅師の「眼横鼻直を認得して人に瞞れず、空手にして郷に還る、故に一毫の仏法無し」というお言葉がふと脳裏に浮かんできて、人間の人間らしい心が呼びさまされたことでした。今まで戦争のために心の底に眠っていた道元禅が新しく再生したということでしょうか。いや

私の道元禅師研究（竹内）

道元禅師が私をまともな人間の心によみがえらせて下さったということでしょうか。いずれにしても今つらつら往時を回想し、このガランピ岬の体験が、私のその後の思想発展の転機となり、道元禅師研究の新しい出発点になったということはいえるようであります。

私は昭和二十一年三月六日復員帰郷、四月一日に復学しましたが、食糧難とマラリア熱帯熱に悩まされてまともな学生生活は送れませんでした。しかし、「万世のために太平を開く」『平和な文化国家日本』を作るのだ、という生き甲斐、使命感が常に私を支えてくれていたように思います。また、私は敗戦の深い思想的感情的傷を癒やすべく、自分の所属する学科にとらわれず、心の欲するままに聴講し、自分なりの勉強につとめました。国史学科に所属しながら、宗教、印哲、哲学、倫理、国文、独文など直接卒業修得単位に関わりのない講義をききながらさまよいました。しかし、結局私の生まれ育てられた仏教に最後の若き日の安心を得たようであります。その意味で最も感謝している講義は、花山信勝先生の「鎌倉仏教」であり、同じく演習の「法華経の義疏」、中村元先生の「インド仏教思想史」

でした。特に「仏教が外の宗教、思想に比べてすぐれた特徴がある」とすれば、それは仏教がいかなる宗教、思想とも対立しない、そういうセオリーを持つていることである」との中村先生のお言葉によって、私は学徒出陣以来の思想的苦悩から始めて脱却し救われる思いとなったことでした。

卒業論文は結局、旧制高校時代に学んだ道元禪師の「自己をならふ」という教えが忘れられず、ゆきつくところそれは、自己が生まれ育てられた曹洞宗寺院の宗祖「道元禪師以外にない」と思い定め、大学の指導教官もこのことを話すと喜んで賛成され、国史学科に身を置きながら「道元」をやることの意義の大きさを語られ励ましてくれたものでした。

卒業論文の題目は、つまるところ「道元の宗教に関する一考察」となりましたが、「俗系の研究」が主となり、「禪師の宗教」については、むしろつけたしとなり、論文全体としてはまとまりのない失敗作だった、と悲観的でした。大学院の進学もおそらく駄目だろうと思っていたところ、合格していきまして焦眉が開かれた思いでした。研究テーマは一応「道元の研究——日本思想上における道元——」

としたのでした。私は実は中学校以来文学、国文が好きだった関係、道元禪師の思想と仏教文学思想の比較に興味をもっており、また禪師の「無常観」について、自分自身の人生問題とも関連して深く興味を持つていました。たまたま私の旧制高校時代の恩師の論文に「道元の思想は古代日本人の楽天的人間観の延長線に位置づけられる」という意味の説に遭遇して、興味と反発を覚え、「万葉集」以来の古代からの文学作品に見られる「無常観」と禪師の無常観とを対比して追求しようと考え、その結果ものした論文が「万葉人の無常観」でこれは大学院の報告書として確か提出したと思いますが、後に学会誌に掲載となりました。

しかし、こんなことばかりをしていたんでは、「道元の研究」そのものの研究がいつまでたってもできないのではないのか、という不安感がいつもつきまとって離れませんでした。そんな悩みを大学の恩師に打ちあけたところ、「道元禪師と碧巖録」との関係が古来問題になっているがやってみたらどうか、という指導がえられたのです。そこで私はこのテーマの勉強、研究を大学院時代最後のものとし

てやってみようと決意し、少しオーバーな言い方かもしれませんが、当時私の持てる総力を結集してこの研究に没頭しました。冬の寒い一、二月の日々も毎日、大学の図書館に通った往時を思い出します。約二〇〇枚ほどの論文にまとめて提出しました。これが「永平道元と碧巖録」で、古来学問的には信ずるに足らずとした道元禅師の一夜碧巖将来説を略々実証的に肯定したのでした。その後も、私はこのテーマに関心を持ち続け、鏡島先生とも論争させていただき現在にいたっています。論文題目の一の1、二の2、3、15、16、30、31の論文がそれです。この論文の内容を仏教大学での印仏研の学会で最初に発表しました時、宗門の方々までたくさんお見えになりびっくりしたことを思い出しますが、この論文を仕上げて始めて学問とはどういうものかを如実に体験でき、漸く「道元禅師の研究」の方向が見えてくるように思われました。こうして私の修学・学生時代の「道元禅師研究」は終わりを告げ、一つの段階を超えたのでした。

私の道元禅師研究（竹内）

二

私は大学院時代は都立文京高校の定時制で歴史（世界史、日本史）の教師をして昼間は大学の講義・演習に出たりして勉強していたのですが、大学院満期修了の昭和二十九年には全日制に代わっていました。私は前にも申し上げましたように、教師の道を歩くことを自分の人生にしたいと志していましたので、文京高校への奉職は、その思いが叶えられ、自らに与えられた天職と考え、張り切って勤務いたしました。私の教育観の基本理念は、「これまで大学院時代までに学び、研究してきた道元禅師中心の学問研究の成果を教育の場に生かす」ということ、そして「学問と教育の一致、一如化」を目指して進むということでした。そしてそのためには道元禅師の全体像——その行動と思想を把握して、歴史教育の中に生かす工夫をすることであると考へて、その歴史的、全体的研究に志し、授業の中に禅師の生涯の行動、「随聞記」などに見られる言行を、その都度授業内容に興味深く織りこんで実施したことでした。このことは真面目な生徒には印象深かったとみえ、四〇年も経

た今日でも教え子たちがよく思い出を話してくれ、嬉しく思っています。このころ、「歴史を作るのは人間である」という反省の上になつて、「人物叢書」の発行（吉川弘文館）が一つのブームになっていました。私も道元禅師を卒論で研究テーマにしたものとして、その著者の仲間になれば本望だかと思つてはいましたが、先に延べました「永平道元と碧巖録」の論文と、その後にとまとめた、5「最近の道元に関する研究について」の論考が認められたようで、森克己、増永靈鳳両先生のご推薦を受けて著作することが決まりました。私は内心嬉しく思いましたが、大へんなことになつたとその責任の重大さを覚え、不安がつきまといつて離れませんでした。この時、京大の赤松俊秀先生の『親鸞』ができていましたので、これに劣らないもの、これと比較してはかしくないものを書かねばと思ひ、編集の基本方針をふまえ、時代と歴史、社会との関連において道元禅師の行動と思想を活写してみようと志しました。そして、私のおかれた立場としては、それが教育の現場に役立つことを目指したのでした。こうして私は、この著作に全力投球をして足かけ約五か年の歳月を要し、昭和三十七年六月に

発行されたことでした。幸い人に喜ばれ嬉しく、また担任だった文京高校の卒業生から出版記念会をやつて祝つてもらいましたが、当初ある学友から「今からこういう性格の本をひきうけて書くようでは将来ろくな仕事ができないからやめろ」と厳しい批判を受けましたが、結果的にはその学友も喜んでくれ、これを契機によりよい仕事をと励ましてくれました。しかし、やはり彼のあの厳しい批判は的中していたと反省しています、が、これ以上どうしようもなかった、あの時書いておいてよかった、との内心の声もしきりです。

私はこの人物叢書『道元』の出版により、道元禅師そのものの研究はひとまず終わりにし、禅師に関連した日本禅宗史、道元禅の展開史を幅広く行ってみようと思ひました。またこの仕事を果たさせてくれた大本山総持寺、独住十九世岩本勝俊禅師を山主と仰ぐ駒込吉祥寺梅檀寮をめぐる方々に厚く感謝をしたことでした。こうして私は、この業績がなんとか買われ、昭和三十八年四月、新設の郷里新潟県の国立長岡工業高等専門学校に招かれて赴任しました。道元禅師の北越入山の年齢より一歳若い四十二歳の時でし

たが、長岡高専への赴任は、禪師の北越入山、永平寺建立のことに我が身を対比し、長岡高専の教育活動の根底の精神を道元禪師の北越入山時より以後の教育の心をもって行おうと内心に誓ったものでした。

長岡高専時代の道元禪師研究は、当初志した、道元禪展開史、禪宗史における道元の研究でした。その具体的な仕事は、全くはからずも意図と一致したのでありますが、依頼を受けた『曹洞宗教団史』（教育新潮社）『日本の禪』（春秋社）の著述でした。前者は昭和四十六年（一九七二）、後者は昭和五十一年（一九七六）に、それぞれ発行、前後合わせて約十年の月日を要し、いずれも教育的現場の立場をふまえ、布教伝道の意図を内心に秘めての著作でして、愛知学院大学の講義テキストとして用いることのできたことは望外の幸せでした。お蔭さまで両著書とも二版を重ねました。この両著述の仕事と併行して新潟県の生んだ二人の洞門の巨匠、南英謙宗（五位思想の大成者）と良寛の研究を志しました。前者の研究の成果は、現在、大学院後期の研究指導テキストとして使用しています。そのほかこの分野の仕事として筑摩書房の『講座禪』、春秋社の『講

座道元』の分担執筆で、いずれも私にとっては、大へんな勉強をさせていただいたわけで、編集者の諸先生に対し感謝の念にたえないものを覚えております。

ところで昭和五十年代は五十五年四月から永平二祖國師孤雲懷奘禪師七百回大遠忌法要会諸行事が行われるというので、二祖國師伝を祖山傘松会より依頼を受け、約五か年間連載を続けました。これは大遠忌が終了しました後、昭和五十七年に一冊の本にまとめられて発行されました。後に人々のすすめにより学位申請論文として駒沢大学へ提出し、昭和五十九年三月学位を授与されましたが、この五十年代は、道元禪の直接の展開史とでもいべき懷奘禪師の伝記研究とその禪に参究し、しかもその二祖國師の禪を広めようとした時期でした。実際昭和五十四年五月～六月には、大本山総持寺紫雲台猊下乙川瑾映禪師親修の予修法要に随身し、また別個に招かれ、北は北海道の中央寺、南は九州福岡の東林寺など（京都宗仙寺、広島国泰寺、鶴見総持寺）、現在両本山の宮崎・梅田両禪師御住職時代の御自坊に拝登し、講演ができましたことは無上の光栄でございました。そして翌五十五年十一月二十七日～十二月十二日、

駒沢大学中国仏教史蹟參觀団の一員（吉田道興先生と一緒）として渡航、天童寺、阿育王寺、嵩山少林寺等、道元禅師ゆかりの仏蹟を拝登、參觀、調査できましたことは、私の生涯における尊い思い出であります。

その外、二祖国師の研究に因んで、国師所持の「一夜碧巖断簡」の発見から、学生時代の「道元禅師と碧巖録」の研究を見直し、継続研究せざるをえなくなったことには一つの驚きを感じ、学生時代の研究がいかに大切なものかを知らされました。鏡島先生からも「二十年も前の一つの研究が再び蘇ってくる」と驚きの声をもらされたことが印象深く思っておこされます。

さて私は、このようにして長岡高専を昭和六十一年三月定年退官して、本学に招かれて四月に赴任いたしました。何しろ新潟からは遠いので幾度か躊躇しました。しかし、ご熱心なお誘いであり、我が儘がゆるしてもらえるということと、何よりも宗門の大学であり、大勢の御縁のある高名な方々が居られるので、最後の御奉公の場として、私としては、この上ない幸せなことと思ひ、もし万一のことがあっても以って冥すべきか、というような気持ちで赴任い

たした次第でございます。以来、今年で九年目になります。

この間の「私の道元禅師研究」は、担当講座の「禅学概論、宗典学研究・演習（学部）、禅学禅思想史研究(1)講義・演習・研究指導（大学院）」を道元禅主軸にこれまでの研究をフル回転して行うことを方針に臨みました。これまで国公立の学校に勤務していました関係上、制定されているカリキュラムや宗教教育のタブー感から、道元禅師の研究成果を教育の場に生かすことに、やはり随分遠慮し、制限しておりましたが、今度はその遠慮は要らぬ、思い切つてやらせてもらおうと考えた次第でした。この気持ちを大学時代の友人に話したら、「それは結構だ、君はまさに水を得た魚のようだ、しつかりやりたまえ」と言つて励ましてくれたものでした。

この禅研在任八か年間における「私の道元禅師研究」は顧みますと道元禅師伝の再考・検討・試作ということでした。その所産として「人物叢書『道元』新稿版」の発行（平成四年二月）であり、又道元禅師七五〇回大遠忌（平成十四年）を念頭においての「永平道元禅師御伝記」の『初祖傘松誌』連載でございます。後者は現在四苦八苦して執筆中で、

「どうなることか五里霧中というところでは。大げさかわかりませんが、世界的視野から道元禪師のことが私なりに描写できたらなあと思いたる思いあがりの気持ちをもっております。お笑い下さって、ご叱正たまわらばありがたいと存じます。また、これまで御縁があつた大学院諸兄の「友情の賜」として平成四年五月に『道元と曹洞禪の研究』（名著翻訳出版協会）が、古稀記念集として発行されましたが、これは私のこれまでの道元禪師研究の総合、そして又、半世紀に亘る私の教師生活、すなわち「学問と教育の一致」を目ざして進んだ教師生活の最後の所産と受けとめて、ありがたいことに思い、改めて学生諸君に限りない感謝の念を捧げたいと存じます。

以上をもちまして「私の道元禪師研究」の概略のお話を終わりたいと思ひますが、この話の「おわり」に臨み、私の現在考えております道元禪師研究の「現代の課題」について申し上げさせていただきますと存じますので御批正いただければ幸甚に存じます。お手元の資料にございますので、読みあげさせていただきます説明に代わらせていただきます。

私の道元禪師研究（竹内）

三

曹洞宗門にとって最も重要な課題は、道元禪師の宗教思想と宗侶・檀信徒の宗意安心の問題である。

この問題は古くして新しい、時代を超えた永遠の課題ともいえる。これと関連して道元思想の学問と信仰の一如化、その世界性の確認、さらに二十一世紀への人類の宗教的救済の課題であろう。そして私ども宗門人はみんな、道元思想がこれらの重要な内面的課題にすべて応えてくれることを期待している。

今、世界は、国の内外を問わず、二十一世紀の新秩序を模索しつつ混迷を極めていと言つてよい。道元禪師の宗教は、少なくともその文化的思想的面においてその混迷を打開して新しい秩序の一翼を担うものでなければならぬであろう。

道元禪師の研究は、江戸時代宗学を経て、明治以来の西洋の学問的セオリーにもとづいて各方面に亘り広く深くまた微細に行われて、それぞれの分野で大きな成果をあげてきた。今やそれらは道元禪師の開教の精神、すなわち宗旨

の原点にかえつて、これまでの学問的成果を総合的に洗い直し、一宗門人に^{きよくせき}踞踏することなく、広く他宗の、否、世界の人々の宗教的安心の確立に資しかつ応えなければならぬ。

なおこのことに関連して最近の『曹洞宗宗報』に山折哲雄先生が、この数年「道元禪師研究」上の大きな論争点であった「本覚法門」批判と「正法眼蔵十二卷本」をめぐる論争の時代は過ぎ、これからは「道元禪の世界性と普遍性」の追求に向けられなければならない」と言われているが、全く凶らずも意見が一致し、意を強くしている次第でございます。

四

最後に退任の挨拶をさせていただきたいと存じますが、これもお手元に資料がございますので、読みあげさせていただきます。これに代えたいと存じます。

私は本年三月三十一日、定年退職となり、同時に禪研究所所長を退任することになりました。

思えば、昭和六十一年（一九八六）四月、本学に招かれて赴任し、翌六十二年四月に、本所所長を拝命いたしました。爾来、在任四期八か年、漸く退任のお許しが得られた次第です。在任の八年間を回想しますと、長いようで短かく、様々な思い出が走馬灯のように脳裏を駆けめぐります。

就任の当初、禪研究所が本学の建学の精神「行学一体、報恩感謝」の源泉である禅を、自ら研究、実践し、さらに教職員・学生のみならず広く国家・社会にも弘めて貢献する使命をもっていることを知り、責任の重大さに一抹の不安を覚えつつ身のひきしまる思いでした。しかも本所の初代・二代の所長、伊藤猷典・田島柏堂両博士は、私の親しく学恩を受けた宗門の先輩でしたので、その佛縁に驚くとともに両博士のご照覧に応えられるように心に精進を誓ったことでした。

幸い所員の鈴木哲雄教授に副所長就任のお願いができ、同じく吉田道興・大野栄人・川口高風の歴代幹事並びに神戸信寅参禅指導主任に支えられ、各所員、運営委員、研究員、事務職員の皆さんの暖かいご協力を得て大過なく任務

を終ることができませんことは、この上ない喜びです。これは偏えにこれら関係者各位の献身的な努力の賜であり、報恩感謝の念尽きないものを覚えます。

顧みて最も印象に残るのは、平成二年（一九九〇）十月二十三日に行われた開所二十五周年・坐禅堂開単十周年記念式典及び関連の諸行事、並びに引き続き行われた『禅研究所紀要特輯号』、『禅研叢書 禅の世界』第二輯の発刊であります。

今つらつら当日の記念写真を眺め、記念の諸刊行物に目を通しますと、関係者全ての方々が全力投球されたあの時の姿が思い出されて、ほんとうに充実した意義ある催しであったと感慨新たなものがかみ上げて参ります。

また毎年夏、参禅会主催で行われてきた研修旅行は、東北・北海道・四国・関東・韓国・マレーシア・シンガポール・越後、そして隠岐・山陰の国内外の諸地方に出向き、禅・佛教諸寺院を中心に、楽しく有意義な研修ができました。旅行終った解団式の反省会パーティーは忘れえない楽しい思い出です。この間とくに私事に関連して恐縮ですが、平成五年（一九九三）においては、「越後の古刹と良寛の

私の道元禅師研究（竹内）

里をたずねて」をテーマとして、拙寺十日町市神宮寺の三十三年に一回行われる観世音長期大開帳の時期にご来山下され、宝前で読経会を修行していただきましたことは、この年度の本『紀要』口絵に観音堂（新潟県文化財）の写真を掲載して下さいましたことと併せて、終生忘れえない感激であり、禅研究所関係者各位の心温まるご高配に改めて深甚なる謝意を表します。

次にもう一つの年中行事である全学対象の春秋二回の講演会、また研究発表会も全て毎年予定通り実施でき、全学の教職員、学生諸君の積極的なご協力を得て、講師に松原泰道・高田好胤・山折哲雄・ひろさちや・太田久紀・花山勝友・芳賀幸四郎・西村恵信・東隆真・田中良昭また中国の楊曾文など宗教界、禅・佛教学界の名士を迎え、毎回、大講堂・学院会館等の会場は殆ど満杯の盛況を呈しました。また毎月、本学院の世界に誇る坐禅堂において行われる火曜参禅会も十二月の摂心会を含め、真摯な学内外の有志の参集を得て、殆ど欠かすことなく実施できましたことは、私にとってかけがえのない体験であり法幸であって、内心のひそかな誇りともなっております。ついで本誌研究紀要

も号を追って充実し、最高水準の研究論文が次々と発表されて、学界において高い評価を受けていることは嬉しい限りです。私も在任期間三編の論文発表の機会を与えていただき感謝しております。

ところで私の約半世紀に亘る教師生活の一つの大きな夢は、宗門の大学で仕事をさせてもらうことでした。それが私の最後の教師生活で果せたばかりでなく、禅研究所所長として働かせていただきました。全く身に余る幸せな人生であったと、この任をお与え下され、ご指導、ご法愛を賜りました竹田鐵仙・小出忠孝両学院長先生に改めて厚く御礼申し上げます。

昨今、二十一世紀を間近に迎え、阪神大震災やドイツ・フランス・オランダ等の大洪水災害など国の内外に天変地災が起こり、加えて世界各地に民族的宗教的紛争が絶えず、世紀末的混迷の状況が続いています。

しかし禅はいかなる時処においても、人間の尊厳と意志の力を信じ、永遠の今に平和を実現し、慈悲の心をもって現実に逞しく生きてゆくことを教える宗教です。

このことを思う時、禅研究所が現在及び将来に果すべき

如何に重大な使命を持っているかは贅言を要しません。関係者各位の一層の自重自愛と研鑽を希う次第であります。最後に、本禅研究所および参禅会が、これまでのように、定められた諸規程に則ってこれを実践するとともに、さらに関係者各位が心一つにしてさらなる国際的学際的な禅の布教を目指して自由に潑刺と活躍されんことを祈念して退任の辞といたします。

どうも長い間ありがとうございました。

研究会資料

竹内道雄、道元禅師研究関係主要著書・論文題目

一、学生時代（昭和二十四年四月～二十九年三月）

1 永平道元と碧巖録 『芸林』第四卷第五号、芸林会（昭和二八年一〇月）

2 大久保道舟著『道元禅師伝の研究』（書評）『歴史教育』第一卷第二号、日本書院（昭和二八年一〇月）

二、教師時代

〈東京都立文京高等学校時代〉（昭和二十三年四月～三十八年三月）

1 道元禅師と碧巖録の祖師達 『芸林』第六卷第六号（昭和三十一年三月）

- 2 永平道元と碧巖録―一夜碧巖の道元将来説について『宗学研究』第一卷第一号、駒沢大学(昭和三二年三月)
- 3 道元禅師の碧巖録将来について『印度学仏教学研究』第四卷第二号、日本印度学仏教学会(昭和三二年三月)
- 4 万葉人の無常観―道元の一助として『芸林』第八卷第六号(昭和三二年一月)
- 5 最近の道元に関する研究について『日本仏教史』第一卷第四号(昭和三三年五月)
- 6 道元禅師の父久我通親の性格『宗学研究』第一卷第二号(昭和三五年一月)
- 7 道元の宗教の歴史的な性格―発心から渡宋までの行実と思想発展『文学』第二九卷第六号、岩波書店(昭和三六年六月)
- 8 道元の宗教の歴史的な性格―在宋中の行実と思想発展『日本歴史』第一六〇号、吉川弘文館(昭和三六年一月)
- 9 『道元』(人物叢書88) 吉川弘文館(昭和三七年六月)
- 10 道元の出家意識と世俗への関心―深草時代を中心として『日本及日本人』再刊第一二六号、日本新聞社(昭和三八年一月)
- 〔国立長岡工業高等専門学校時代〕
- 11 道元禅師の在俗に対する関心について『宗学研究』第五号(昭和三八年四月)
- 12 久我雅実に関する覚書Ⅰその時代と生涯『長岡工業短期大学・高等専門学校研究紀要』一卷二号(昭和三八年一月)
- 13 久我雅実に関する覚書Ⅱその性格について『長岡工業短期大学・高等専門学校研究紀要』一卷三号(昭和三九年一月)
- 14 『永平寺・総持寺』(分担執筆) 教育新潮社(昭和三九年九月)
- 15 「正法眼蔵」と「碧巖集」との関係についてⅠ『長岡工業短期大学・高等専門学校研究紀要』一卷四号(昭和四〇年三月)
- 16 「正法眼蔵」と「碧巖集」との関係についてⅡ『長岡工業短期大学・高等専門学校研究紀要』二巻一号(昭和四〇年一月)
- 17 永遠の平和への悲願『あそか』第五八号、日本仏教文化協会(昭和四〇年一月)
- 18 道元とその法流『月刊日本史』第三三三号、二宮書店(昭和四一年六月)
- 19 宗祖の教育的活動―道元の場合『教育新潮』第一七巻第一〇号、教育新潮社(昭和四一年一月)
- 20 道元の期待する人間像について『あそか』第七〇号(昭和四一年一月)
- 21 南英謙宗伝考―その行実と問題点『社会文化史学』第

私の道元禅師研究(竹内)

私の道元禅師研究（竹内）

- 三号、社会文化史学会（昭和四二年八月）
- 22 日本における曹洞禅の展開 『講座 禅四「禅の歴史」—日本』（分担執筆）筑摩書房（昭和四二年二月）
- 23 『曹洞宗教団史』教育新潮社（昭和四六年六月）
- 24 栄西と道元・五山文学（『日本における価値観の系譜』（分担執筆）評論社（昭和四七年四月）
- 25 道元の在宋中の思想発展について 『現代思想』一の一、青土社（昭和四八年一月）
- 26 道元伝に関する二、三の問題（『道元禅の思想的研究』（分担執筆）春秋社（昭和四八年二月）
- 27 道元禅師と達摩大師—北越入山の真意 『宗教』第一六四号（昭和五〇年一〇月）
- 28 『日本の禅』春秋社（昭和五一年九月）
- 29 道元とその教団 『歴史公論』第二卷第一号、雄山閣（昭和五一年一月）
- 30 続 永平道元と『碧巖集』—一夜本「碧巖集断簡」の発見に因みて 『日本宗教史論集上巻』吉川弘文館（昭和五一年二月）
- 31 再び道元禅師の「一夜碧巖」将来について—鏡島元隆博士の高説に答える 『宗学研究』第一九号（昭和五二年三月）
- 32 道元禅師と孤雲懷辨 『宗教』第二〇五号（昭和五四年三月）
- 33 初期僧団の展開—教団（『講座道元「道元禅の歴史」』（分担執筆）春秋社（昭和五五年二月）
- 34 『孤雲懷辨禅師伝』春秋社（昭和五七年四月）
- 35 道元禅師の門弟たち「禅の世界—道元禅師と永平寺」、読売新聞社（昭和五八年五月）
- 36 良寛と宗教—良寛との出会 『良寛』第四号、良寛研究会（昭和五八年一月）
- 〈愛知学院大学時代—愛知学院大学文学部就任以降の論文、著作等〉（昭和六十一年四月—平成七年三月）
- ・ 大本山総持寺鶴見移塔の歴史的現代的意味 愛知学院大学『人間文化研究所報』第一〇号（昭和六一年）
 - ・ 耕雲傑堂和尚之入室『曹洞宗実践叢書』第一〇卷（分担執筆）大蔵社（昭和六一年）
 - ・ 『中里資料編』上巻（監修）新潟県中里村史編纂委員会（昭和六一年）
 - ・ 『川西町史資料編』上・下二巻（監修、分担執筆）新潟県川西町史編纂委員会（昭和六一年）
 - ・ 中世越後の禅宗教団の展開について 曹洞宗宗学研究所・宗学大会（昭和六一年）
 - ・ 『神宮寺道宗和尚遺稿私の生涯』（編集・出版）臨泉山神宮寺（昭和六一年一〇月）
- 37 中世越後の禅宗教団の展開について 曹洞宗宗学研究所・『宗学研究』二九号（昭和六二年）

- 38 道元の北越入山の意味について『雪国の宗教風土』（分担執筆）名著刊行会（昭和六十二年）
- 39 禅宗教団の展開・中世の生活と信仰『新潟県史通史編二
中世』（分担執筆）新潟県（昭和六十二年）
- ・ 宗教（近世）―資料と解説（『中里村史資料編下巻』―
近世・近代・現代）（監修、分担執筆）新潟県中里村史
編纂委員会（昭和六十二年）
- ・ 神社と寺院（近代・現代）―資料と解説（『中里村史資
料編下巻』―近世・近代・現代）（監修、分担執筆）新
潟県中里村史編纂委員会（昭和六十二年）
- ・ 中世の宗教、『川西町史通史編上巻』（監修、分担執筆）
新潟県川西町史編纂委員会（昭和六十二年）
- ・ 宗教界の動き・村民の生活と民権運動、高僧の出現・教
育の普及と発展、社寺・戦時下の教育・文化・社寺、戦
後の宗教界・教育の充実と文化の発展（『川西町史通史
編下巻』（監修、分担執筆）新潟県川西町史編纂委員
会（昭和六十二年）
- ・ 『川西町史通史編上巻』（共著、監修）新潟県中魚沼郡
川西町（昭和六十二年）
- ・ 『川西町史通史編下巻』（共著、監修）新潟県中魚沼郡
川西町（昭和六十二年）
- ・ 高山少林寺参観の覚書『日本歴史』第四七八号（昭和
六三年）
- 私の道元の禅師研究（竹内）
- 40 “ただひたすら坐る”ことの大切さを確認『禅の風』第
七号（昭和六十二年六月）
- 41 禅と大学教育―「重雲堂式」をめぐる愛知学院大学
『人間文化研究所報』第一五号（平成一年）
- ・ 『妻有郷―ムラと人びと―』（書評）新潟日報 新潟日報
社（平成一年）
- ・ 『妻有地方の精神文化―地域の心をさぐる』（分担執筆）
十日町市博物館（平成一年）
- 42 地方禅宗史の研究―越後・妻有地方を中心として 愛知
学院大学『禅研究所紀要』第一七号（平成二年三月）
- ・ 越後・佐渡における密教の世界―古代・中世創立寺院を
中心として『佐藤匡玄博士頌寿記念東洋学論集』朋友
書店（平成二年）
- 43 近代曹洞宗教団の形成―その試練について 愛知学院大
学『人間文化研究所報』第一六号（平成二年）
- 44 『曹洞宗新潟県寺院歴住世代名鑑』（監修、分担執筆）
新潟県曹洞宗青年会（平成二年）
- ・ 『日本の禅』（修訂・再版）春秋社（平成二年）
- ・ 李乾熙訳『日本の禅』ソウル行林社出版（韓国語）一
九八九年六月）
- ・ 李乾熙訳『道元』ソウル名著翻訳出版会 一九九二年
一月）
- 45 日本禅宗史の研究―越後における中世禅宗教団の展開―

私の道元禪師研究（竹内）

- 愛知学院大学『禪研究所紀要』第十八・十九合併号（平成三年三月）
- 46 越後における中世禪宗教団の研究―新資料と南英謙宗の年譜― 愛知学院大学『禪研究所紀要』第二十二号（平成六年三月）
- 47 『道元と曹洞禪の研究』 名著翻訳出版会（平成四年五月）
- 48 中世妻有の禪宗教団『市史リポートとおかまち』第五・六・七号（平成五・六・七年）
- 49 道元禪師御伝記 大本山永平寺『傘松』五八六―六一七号（平成四―七年）